

第2章 スノークールライスファクトリー構想の軌跡

清水 智仁

2.1 スノークールライスファクトリー建設までの経緯

2.1.1 キーパーソン —篠田久雄氏と岡田静夫氏

沼田町のスノークールライスファクトリー構想の原点は、篠田久雄前沼田町長と、岡田静夫前沼田農協組合長の2人の存在である。

篠田氏は沼田町に生まれ、沼田高校を卒業後、農家の跡取りとして青年団で活動、「新しい農村づくり」を目標としていた。30歳代に司法書士・行政書士の資格を取得、1968年、35歳で測量・調査・設計事務所を開設する。その後、町議会議員になり、2期目には副議長、3期目には議長を務め、1983年4月に町長選に出馬、当選する。

岡田氏は篠田氏の5歳年下で沼田町生まれ、高校は深川西高校を卒業、篠田氏と同じく農家の跡取りとして青年団で活動する。二人が住む更新・高穂地区は「両地区から一期交代で議員を出す」という協定があったが、高穂地区の篠田氏の一期目の終わりに、更新地区の岡田氏は「続けてやってくれ。議員は継続こそ力だ」と言い、篠田氏にその座を譲った。それ以来、信頼しあう仲になった。岡田氏は理論的で計数に明るく、誠実な人柄から、青年部などに推され、1972年3月、37歳の若さで農協理事に選ばれる。1982年、病死した専務理事の後を継いで専務理事、93年に組合長になる。

この二人の結束なしにスノークールライスファクトリー構想はなかった。

2.1.2 米バラ施設構想

1995年3月、新農政プランや新食糧法制定を前に、農協青年部から米バラ施設構想が提案された。米バラ施設とは、粳を麻袋や紙袋に入れずにそのまま一カ所に集めて乾燥させ、整粒作業をして品質を高めて出荷する施設であり、均質な良質米をつくるには欠かせない。岡田氏はこれに賛成、篠田氏も行政として支援しようと決意した。ここで問題になるのは資金の調達であるが、議論は資金的なことよりも沼田農業にとって何が必要か、思い切った構想を検討する方向に進んでいった。

構想は、町・農協・土地改良区など農業機関がメンバーとなった総合調整機関である営農部会で検討され、6月には町議会、さらに関係各機関との懇談会が開かれた。営農部会に中心人物が、当時の産業課長の矢野潔氏である。営農部会は、町議会産業民生常任委員会との懇談会の際、北海道の米主産地として生き残るために施設が必要であることを強く説いた。矢野氏を軸として営農部会は、半乾貯留二段乾燥調整施設がベターであるとの結論を出す。半乾貯留二段乾燥調整施設とは、農家で半乾燥した粳を施設に集荷し、施設内でさらに一定の水分量まで乾燥させ、粳のまま低温で貯蔵、出荷する時には死米や青米な

どを除去する調整をし、一等米として市場に送り出すものである。最大の課題はやはり、20億円もかかる資金調達である。農協が事業主体となる当初の構想では、国の補助事業対象になったとしても7~8億円が限度であり、残りの10数億円を出す余力はどこにもない。全く先が見えない状況であった。

7月、沼田町農協では、営農部会の素案を検討する「米バラ施設構想プロジェクト委員会」が発足、農事組合の代表10人を含む18人が委員に委嘱された。8月23日、第一回委員会が開かれたが、各委員から次々と疑問や批判が飛び出した。しかし、当時の沼田町農協営農部長の岩越壮康氏や矢野氏らは「この構想でなければ、沼田農業は生き残れない」と訴え、委員会幹部も次第に「危機」を共有した。一般農家の人たちも米調整施設の必要性を理解し、説得には2ヶ月ほどしかかからなかった。

2.1.3 ウルグアイラウンド対策

同じ頃、篠田氏は予算陳情のため空知支庁へ出掛けた。そこで話を受けたのが当時の地域政策部長である石田哲氏である。篠田氏とは旧知の仲であり、農政・地域政策に長けた人物であった。石田氏はその計画を聞くうち、これからの米主産地にはこういう施設が必要であり、モデルケースとして実現できないかと考えた。

道庁での協議を受けて9月7日、空知支庁から1995年度第二次補正予算が使えるようで、ウルグアイラウンド緊急対策費の農業基盤整備事業として沼田の米バラ施設構想が候補の一つに上げられているとの報告があった。篠田氏らは当初、1996年度の国の一般会計予算への計上を目指していた。しかし、ウルグアイラウンド対策緊急事業としてそれが前倒しされ、1995年度の国と道の第二次補正予算に計上される可能性が出てきたのである。前者の場合には沼田町は総事業費の27%を負担することになるが、後者では町の負担を約10%に抑えることができる。また、この補助事業は町が事業主体になることが条件になるが、農協や農家への負担が少ないという大きなメリットがある。篠田氏は岡田氏を呼び出した。農協がいくら出せるかを質問したところ、岡田氏は2.5億円と回答した。篠田氏は町が事業主体となって建設することを決意した。当初、米バラ調整施設は、農協が事業・運営主体となり、町に支援を求める方式が検討されていた。だが、町が事業主体となり、行政が建設、農協が運営主体となることで、ウルグアイラウンド対策費で事業費をつけてもらえるならば、農協や農家の負担が最小ですむのである。二人は二人三脚であらゆる説得工作を進めていく。

篠田氏は自ら道庁農政農村振興課を何度も訪ねて「いかにこの施設が必要か」を繰り返した。だが、空知・上川両管内の米どころからたくさんの建設陳情があるために、簡単に決まるものではなかった。篠田氏は農林水産省総務審議官の本田浩次氏を訪ねた。本田氏は篠田氏から計画の説明を受け、やるからには日本一の施設を目指し、これはという特徴のあるものを考えてほしい、沼田がモデルとなるものを造るなら国としても最大の応援をしようと言った。沼田に戻った篠田氏は、矢野氏らに対して早急に研究し、アイデアを持ち

よるように指示した。矢野氏や岩越氏らは「沼田らしさ」を求めて頭を悩ます。金粉・水車・水・氷、さまざまなアイデアが出された。他方、ランニングコストを安くすることが農協関係者の第一目標であった。

2.1.4 雪の利用

この時、篠田氏の頭にあったのが雪の利用である。雪国における作物の保存方法として、雪の利用はごく一般的なものであった。雪の中は零度以下になることはなく、湿度が 100% であるために水分量が高い野菜の保管に適する。雪は雪国ならば無尽蔵にある資源であり、ランニングコストが安く、氷と比べて表面積が広い。篠田氏は 95 年 8 月、「コメ貯蔵施設冷熱源に雪を利用したい」と岡田氏に持ち掛けた。岡田氏は通常の電気式冷却機を想定していたので当初は驚いたが、篠田氏の構想に賛同した。道民にとって邪魔者でしかなかった雪を冷熱源として使う、これが固まったアイデアである。

雪を使うことが決まったものの、これを実際に貯蔵に使えるかどうかは別問題である。1995 年 9 月、篠田氏は石田氏を訪ねた。石田氏はもとより、食糧安全保障の見地から。米の備蓄構想がいずれ政治や行政のテーマとなると考えており、北海道に無尽蔵にある冷熱エネルギー源である雪に注目していた。雪を使うという発想を聞き、石田氏は雪を利用した農作物貯蔵を研究している媚山政良室蘭工業大学助教授（当時）を紹介した。

施設規模などの概要はほぼ固まっていた。半乾貯留二段乾燥調整施設とし、沼田町の全水稻耕作面積約 2553ha（96 年度実績 2510ha）のうち約 70%に当たる 1500ha で収穫される籾約 1 万トンを乾燥・貯蔵・調整するというものである。篠田氏は媚山氏のもとへ矢野氏を派遣し、低温貯蔵施設建設への協力を依頼した。想定していた籾の貯蔵量は 4 万表（2400 トン）、雪を冷却源として使う本格的な施設としては世界初かつ米貯蔵施設としても国内最大級の施設になる。媚山氏は協力の意を示した。仮に媚山氏が断っていたら世界初の利雪型米貯蔵庫は完成しなかったに違いない。

沼田町の米バラ低温乾燥調整施設は「SNOW COOL RICE FACTORY」と名付けられた。総工費 16 億 2317 万円のうち、国と道の補助金などを合わせて 14 億 6000 万円、町の負担は 1 億 6000 万円余に抑えることができた。着工が 1 年間早まったことで 96 年産米の収穫時点から施設の使用ができるめどが立った。

2.2 キーパーソンが振り返るスノークールライスファクトリー構想

ここからは、今回行った聞き取り調査における回答を参考にしながら、キーパーソンである人たちのうち、篠田久雄前町長・岡田静雄前 JA 北いぶき代表理事組合長・沢田浩樹 JA 北いぶき米産事業部長・矢野潔沼田町就農支援実習農場長の 4 人の回答から、スノークールライスファクトリーに対する当時の考え方や記憶に残っている事柄、現在の評価について整理し、比較を試みる。

2.2.1 篠田久雄前沼田町長

①雪という発想について

篠田氏は沼田町に生まれ、小学校から高校まで通った。小学校低学年の頃は大変、冬だと風邪を引くし、道路も整備されていない。だが、それを逆手に雪を生活に取り入れることはできないか、と考えていた。

スノークールライスファクトリー建設にあたっては、「雪は使ってきたじゃないか」と農家を説得した。沼田町は富山や北陸出身の人が多く、大根やキャベツなどの野菜を雪の中に貯蔵する習慣があった。あるいは、雪を囲って円筒を建て、そこから取り出して食べる、という生活をしてきた。痛みは出るが、かえって糖度が増した。野菜だけでなく、当時は屠殺解体した豚を持ち帰って各家庭で雪の中で保存していた。沼田町民の中でも雪を利用した貯蔵の歴史は深い。雪という発想は確かに周囲を驚かせはしたが、沼田町民特有の文化が受け入れる基礎となった。これが説得に費やした時間が短くなった大きな理由である。

②施設建設と競争入札

スノークールライスファクトリーを建設する際、農協が考えた完璧な施設、米にビニール・石・不純物の入らない検査ができるような、全く心配のいらぬ施設にするためには、23億円ほどかかるとの試算が出た。本来なら到底建設できないものを可能にしたのが競争入札であった。「世界で初めての雪を使った施設」、「北国のモデルになる」、これらの言葉を売りにメーカーに売り込んだ。この建設自体が儲けになるような話ではないが、スノークールライスファクトリー構想が成功すれば業者にも実績となり、受注が増える可能性は大きい。この構想の新しさ、規模、そして各報道機関を利用した大規模な宣伝が23億円の建設費を16億で可能にした重要な要素となっていた。

③スノークールライスファクトリー構想の収穫

第一に、農家の負担が軽減したことが挙げられる。負担が激しい農作業は、田起こし・田植え・除草・収穫などがあった。機械が導入されるようになって、田起こし・田植えは明らかに楽になった。除草は、除草剤が普及し、また、飛行機による散布をするようになり、個人で行う必要がなくなった。最終的には、農家の主な負担は収穫作業だけになったのである。かつては個別の農家が規定の水分に達するまで乾燥を行い、それを袋に詰めて出荷するまでの作業を行っていた。この負担を大きく軽減したのが米バラ調整施設であった。重い負担が無くなったために、高齢者でも農業が続けられるようになった。

第二に、沼田町自体の活性化である。高齢化が進む農村にとって嫁探しは重要な問題であった。スノークールライスファクトリーが出来てからは、この施設を見て結婚を決めた人もいた。農家生まれの女性が農家に嫁ぐことはほとんど無く、都会の女性が夢を持ってやってくる人が多い。沼田町の農業を都会の女性にアピールする際、スノークールライスファクトリーの存在は大きい。また、この事業に関して、各界各層から様々な団体が視察のために沼田町を訪れた。これに際し、宿泊や食事を沼田町であることを条件にした。そうすることで、温泉や飲食店が活性化し、沼田町全体が活気づいた。

④現在の評価

農家の心配はコストだった。スノークールライスファクトリーのランニングコストを下げるためには、多くの農家に米を入れてもらい、稼働率を上げる必要があった。当初スノークールライスファクトリーの稼働率は70～80%、今では、農協合併・増設・利雪2号の建設などにより、およそ倍ほどの稼働率になり、コスト問題は解決された。

スノークールライスファクトリーで成功した雪エネルギー構想を、沼田だけではなく、広い範囲で取り組んで、いい米を一年中コンスタントに出荷できるようにネットワークを広げていくことが理想である。

2.2.2 岡田静雄前 JA 沼田組合長・沢田浩樹 JA 北いぶき米国農産事業部長

①雪という発想について

雪という発想に驚きはしたが、雪を使うこと自体には抵抗はなかった。それよりも大事だったのは、今よりもいいものが作れるか、農家の負担は軽くなるのか、コストは高くないのか、ということだった。JAとしては雪でなくてもよかった。

②施設建設について

今まで沼田町では、複数の農家が共同で作業をする沼田方式で農業を行っていた。施設を建設するにあたり、この沼田方式が崩れてしまうのではないだろうかという懸念があった。沼田方式が崩れてしまった場合のために、建設の前から懇談会を開いていた。懇談会の中で、米を粳で集めていい米を作ろうという方針は決まった。懇談会が出した建設の条件は、利用料が500円を切ることであり、1994年の懇談会では、施設の利用料が500円を下回るためには町が事業主体となった施設を建設することが必要であるとの試算が出た。また、新しく機械を買ってしまった農家からは文句が出たりした。粳で集めるので、乾燥に失敗したとしても、また乾燥しなおせばいいので、試験を何度も行えるという強みがあった。その点で玄米は厳しい。

③スノークールライスファクトリー構想の収穫

スノークールライスファクトリーが出来たことによって農家の負担が軽減され、沼田町の農業が持続可能なものになった。60kgの米袋を運ぶのは大変厳しいものだった。負担が軽くなったことから、転作率も上がって、農家の生活が維持できるようになった。農家もこれほどまでに秋の収穫作業が楽になるとは思っていなかった。スノークールライスファクトリーが出来てからは、春先さえ乗り切ればまた来年頑張れるというくらいになった。

④現在の評価

今では沼田町の米は道内トップ。しかも、それが金太郎飴のようにすべての米が同じ品質で出せる。これがJAにとっては最高の喜びで、生産者にとっても誇りや自信につながる。頑張る理由につながり、信頼にもつながってくる。そしてさらに米の質が良くなるという、いわゆるよい循環が生まれた。スノークールライスファクトリーは、沼田町にとって、JAにとって、生産者にとって、一世一代の大冒険だった。それが成功を収め、沼田

町がお荷物自治体と呼ばれていた過去を払拭した。

2.2.3 矢野潔沼田町就農支援実習農場長

①雪という発想について

施設を計画した時、道庁の役人が国にかけあい、かえてきた答えが特徴のあるものにしろということだった。町長に考えろと言われ、センターや農協の人たちで考えた。まず思いついたのが、米を乾燥するのに卵を使おうということだった。農家と畜産の共存が思いついたことの一つだった。色々考えて、雪だるま型の発泡スチロールの中に雪を入れて、さらにその中に米を入れようという意見があった。水車や風車などの意見も上がったが、町長には何も思いつかなかったと言った。後日また考えてくれと言われ、その時に雪だるまの話を持ち出した。町長が、空知支庁との会合でそれを話して、担当者が雪は面白いと食いつき、雪の利用をすることを考えはじめた。

②施設建設について

スノークールライスファクトリー構想について、媚山氏に説明すると、簡単に返事をしてくれた。雪を、乾燥・貯蔵・備蓄に使おうということになった。雪で米を備蓄するということを道庁に言うと、これだけ米が余っているのに備蓄するとはどういうことなのかと怒られた。もし湿気で米にカビが生えたらどうするのか、腐った場合に出る損害をどうするのか。道庁をなんとか説得し、農林水産省には雪を使うことは伏せて、施設を完成させ、雪で保存した米、雪中米が誕生した。

③スノークールライスファクトリー構想の収穫と現在の評価

雪中米は、他から必ず真似される。だから沼田町は差別化のために、常に一步先に進まなければならない。まずは米だけでなく、じゃがいもや蕎麦などの農産物に雪を利用して貯蔵することを考えた。その結果考え出されたのが雪中じゃがうどんである。でんぷん質は、冷蔵しておけば分解され、糖度が増して旨みや甘みが増してくる。このうどんを、ほろしん温泉のほたる館で出して食べてもらっている。あとは雪中キャベツ、雪中味噌などがある。あとは、花のストックを冷しておいて成長を止めたり、夏場に雪を使ったイベントを催したりした。さらには施設の冷房に雪を使ったり、真夏の牛舎の冷房にも使ったりした。雪の利用法が広がる可能性はある。

2.3 考察

スノークールライスファクトリー構想はなぜなしえたのだろうか。第1節を見る限りでは、まさに篠田氏を中心としたサクセスストーリーである。篠田氏が沼田町を引っ張って、雪という独自の発想からスノークールライスファクトリー構想を考案、さまざまな人物たちと協力し合いながら、急ピッチで構想をまとめあげ、スノークールライスファクトリーを建設し、篠田氏の考案した雪中米という名前で初出荷というストーリーである。篠田氏

のカリスマ性なしにはこの事業の成功はなかつただろう。

しかし、キーパーソンである人々からのインタビューからは、スノークールライスファクトリー構想の別の姿が見えてくるようにも思える。

雪という発想については、篠田氏が、子供の頃からの原体験がきっかけであると述べている一方で、矢野氏は、職員などが知恵を絞ったと述べている。ただ、いずれにしても、雪という発想自体は役場によってまとめられたということは間違いのないところである。これに対し、JA の場合には、その施設がどうすればいい米を、低いコストで作れるかに関心があり、スノークールライスファクトリーの最大の特徴ともいえる「雪」に対して必ずしも強い思い入れがあったわけではなかった。ここには大きな意識の差がみられる。

施設建設については、三者三様の想いがある。篠田氏は、最高の施設を安く建設するため、資金調達の方法や PR に腐心していた。JA 関係者は、施設を実際に利用する生産者である農家を説得するために努力している。矢野氏は、媚山氏との交渉など、スノークールライスファクトリー建設の「裏方」として活動している。このそれぞれの活動がうまくかみ合った結果、スノークールライスファクトリー構想を現実のものとなったといえる。

スノークールライスファクトリーの成果と現在の評価については、一番大きい成果として生産者である農家の負担が軽くなったことを指摘する点で一致している。これにより、農家の存続可能性が高まった。その他に、篠田氏は、沼田町自体の活性化をあげている。全国初の大規模なこの構想を全国に先駆けて成功させたことで、全国の注目を一挙に集めることができた。JA が挙げたのは、米の質の向上である。この構想の発端からいい米を作ることに重点を置いていた JA にとって、この収穫がなによりも大きく、また農家が最も喜ぶところである。

おわりに

矢野氏が指摘するように、雪の利用可能性は農産物に留まらない。この雪エネルギー構想を、沼田町に留まらず、ネットワークを広い範囲広げていくことが今後の課題である。

今回、スノークールライスファクトリー構想について調べてきたが、考察を終えて改めて、この構想の成功は、素晴らしい偶然が幾重にも重なって、得たものだと感じる。その偶然を引き起こしたのはやはり、このスノークールライスファクトリー構想を主導してきた人物たちの手腕であるし、決断である。そこには、計り知れない情熱があり、その情熱はあらゆるものを動かした。私はこの調査に参加できたことを光栄に思う。そしてこの調査に協力いただいた方、関わった方々に感謝の意を述べたい。